会報 峠（とうげ）
河井継之助記念館友の会会報
第11号
2012.3
編集・発行 河井継之助記念館
新潟県長岡市長町1丁目1675-1
〒940-0053
Tel.0258-30-1525
Fax.0258-30-1526
頒布価：50円（送料別）

河井継之助に期待するもの

河井継之助記念館友の会理事 脇屋 雄介

スタジオ内でマイクに向かう脇屋雄介さん

河井継之助記念館友の会が間もなく創立五周年を迎えますことに、まず会員の皆様とともに喜びたいと思います。記念館運営の支援団体としてできた友の会ですが、皆様のご後援によって、地道な活動が功を奏して、会員は全国各地に広がって五百九十名を数えています。これは、河井継之助の藩政改革などの業績に共鳴し、その人間性と北越戊辰戦争時の活躍に由来していると思います。また、作家司馬遼太郎さんの『峠』によって、越後長岡藩家老の河井継之助の実像が日本史に照射されたことにもよると思います。

さて、昨年三月十一日の東日本大震災から一年を経過し、その被害の爪跡は、今もって私たちの生活を苦しめています。地震、津波、原発と三重苦の生活を強いられた地元の被害者はもとより、日本各地に広がる放射能被害の怖ろしさは次第に脅威となっています。

私事ですが、日頃の業務、FM長岡の仕事からこの大震災に多くの体験を提案、そして救援をさせていただきました。いちはやく東北の被災地に赴いて臨時災害FM局を設立し、地元の人たちにラジオ放送からの情報を発信するお手伝いをしてまいりました。あるときは鉄塔に登ってアンテナをつけ、あるときは素人のボランティアの人たちに、ラジオ放送の手ほどきをし、また行政とかけあったりして災害放送の役割を啓蒙してきました。

災害情報は、案外、被災者には伝わらず、被災者を孤立させています。そんななかで、唯一詳細で地元情報をもたらすFMラジオの効用は、被災者に向けての必要な情報発信を発揮できたと思います。そういったお手伝いができただけでも、私は自分の仕事に誇りを感じた次第です。

河井継之助は北越戊辰戦争の際に情報不足ではなかったかという研究者がおられます。当時は、今のように政局を地方で探知する術は連絡役が通報するか、書状を飛脚などで伝達するしかありませんでした。政局の分析は、そういった細々とした不確実な情報をもって高い見識で分析し、決断するほかはなかったかと思います。

河井継之助を頂点とする長岡藩士らの情報源は、そういったものに支えられていました。個人的に鑑みると、長岡藩も他の藩も同様なものであったのに、長岡藩だけが開戦の決断をしたのは、情報よりも別の意志があったように思います。それは、長岡藩の政治的立場や歴史風土の問題です。

話をもとに戻しますが、江戸時代の長岡藩の情報量というものは、凄かったということが知られています。侍は勿論ですが、町人も三度飛脚と称し、各商家お抱えの江戸、大阪を往復した人たちがいたとあります。長岡江戸間を三日で到達してしまうシステムは、長岡繁栄の原点であろうかと思います。

そんな中、河井継之助は慶応四年三月に江戸から帰ると、孤立主義をとってゆくところに、何か、私は事情があると思っています。今、日本経済は混迷をきわめていますが、幕末当時の日本も政局、経済ともに行き詰っていました。そんな中で、河井継之助だけが長岡藩の未来に夢を与えています。今、その河井継之助の再登場を願い、日本を幸福にみちた国にしてもらいたいものです。

脇屋雄介（わきやゆうすけ）プロフィール
昭和21年（1946）長岡市生まれ。日本電信電話公社（現NTT）勤務を経て、長岡移動電話システムを設立。現在FMながおか代表取締役社長。JCBA顧問理事。JCBA信越地区協議会会長。新しく高信頼防災ラジオを世に送り出し、今回の東日本大震災において、臨時災害放送局の開局を支援。

峠抄●とうげしょう⑩

六月十八日から十二月十八日まで『まちなか周遊・まちなか偉人館めぐり』というスタンプラリーが行われました。河井継之助記念館、山本五十六記念館ほか、指定された長岡市内にある記念館、五ヶ所のスタンプを集めながら散策して回るというものです。ちなみに当館ではかなり可愛くデフォルメされた継之助の似顔絵のスタンプが押されました。

回って来られた方の中には「長岡出身でこんなに立派な人がいたなんて、勉強不足だったわぁ」と継之助だけでなく長岡の偉人を再認識できたと畏敬をもって、誇らしげに話されていた方もいました。また「建物は知っていましたが、入ったことがない」そんな方に足を運んで頂くきっかけにもなった様です。

一昨年から期間限定で行われているスタンプラリー。少しでも多くの方に、故郷長岡の歴史や文化を担ってこられた先人を『もっと学びたい！』の興味心に、起爆剤となることが出来たら嬉しいなと思っています。

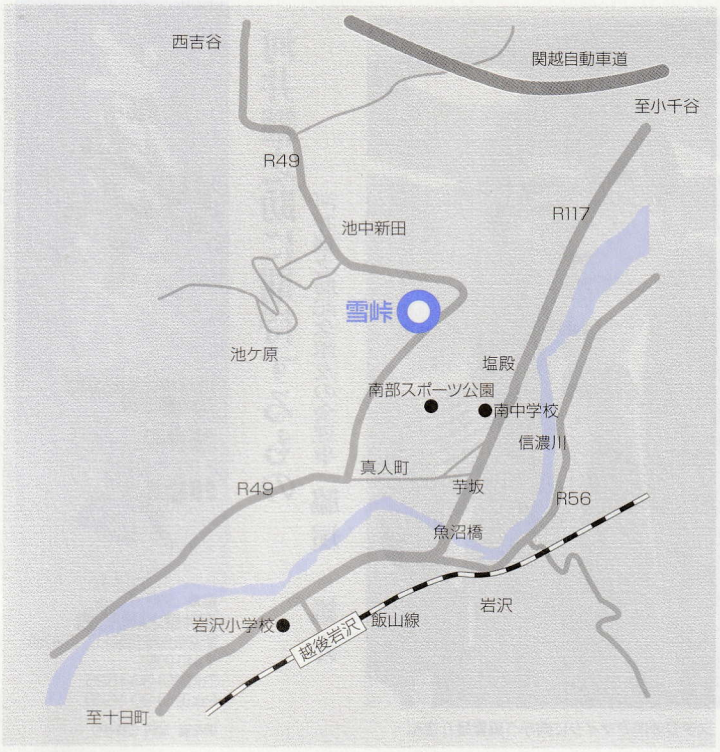
（松山・伊佐）

『峠』の越後長岡を歩く⑧番外編

連載

司馬遼太郎の『峠』には登場しませんが、北越戊辰戦争の発端にかかわる重要な峠が小千谷にあります。その名を雪峠といい、小千谷から中魚沼の十日町に行く難所としても著名でした。

雪峠の由来は定かではありませんが、地形から雪の季節に越えるには難儀なところから付けられた名称であったのでしょう。雪峠は信濃川左岸の河岸段丘上にあり、その麓に芋坂、段丘上に池ヶ原集落があります。



慶応四年（一八六六）閏四月二十六日に、その雪峠に東山先鋒総督府軍に属する信州松代藩兵がさしかかると、峠を守っていた会津藩兵、衝鋒隊士らと交戦したのが雪峠の戦いです。

閏四月二十六日といえば、小千谷談判の五日前で長岡藩も去就を決めかねているところでした。いまでいえば、六月の梅雨の頃でしたから、雨も降り雲も重く垂れていたそうです。

当時の戦闘は互いに大砲を街道上に据えて、相手側陣地に打ち込んでから切り込むという戦法をとっていました。松代藩兵が衝鋒隊の士官桃沢某に斬られると、戦闘は一気に過熱して突撃や退却を繰り返す一進一退となってしまいます。両軍ともに、当時としては最新鋭の大砲と小銃を互いに打ち合い、砲声、銃声は越後の空にこだまして住民たちを震え上がらせています。

松代藩兵は、始め二コ小隊ほどの陣容でしたから、たちまち戦闘は膠着してしまいます。そこに、薩摩・長州藩兵が駆けつけて松代藩兵を応援してから戦局は次第に東山道軍の方に有利に傾いていきます。

それにしても、山の下にいた薩摩・長州藩兵らの勇敢さは、勇猛な会津藩兵らを小千谷に撤退させています。いま、その雪峠には会津藩が構築した砲陣地がかすかに残っています。それは旧道の藪の中にあり、雪峠が古戦場であったことを示す唯一のものとなっています。また、新道の脇に「北越戊辰戦争発端の地」の石碑が建っています。

雪峠石碑

この雪峠の戦いの砲声は、越後長岡城下に聞えて長岡藩兵は臨戦体制に入ります。四月二十六日夕刻、中島兵学所に藩兵が召集されて、南方の藩境に出陣を命じられています。雪峠は長岡藩にとっても運命を決する重要な峠であったといえましょう。

（稲川）

遠方からの客人（まれびと）

●インタビュー⑨雪景色を見に

島岡利昭さん（69歳）

平成24年1月28日

群馬県からお越しの島岡利昭さんは、「群馬泉」というお酒の蔵元さんで祖先の方は新潟県上越市の出身とのこと。今回杜氏の中に長岡市小国町の方がおられ、その方の帰省に伴い前から見たいと思っていた雪景色を見に長岡に来られたそうです。

●長岡の印象は

今年は例年にない大雪だそうですが、太田市では全くと言っていいほど雪が降りません。だから県境をこえて一面の雪景色を見た時にはとても奇麗で感動しました。（雪国の人には申し訳ありませんが）

●来館のきっかけと感想

駅の観光案内所で近くて気軽に立ち寄れる所ということで、河井継之助記念館を紹介してもらいました。

継之助のことは司馬さんの『峠』を読み漠然とした印象を持っていましたが詳しくはわかりませんでした。館内をガイドの方とまわり、特に歎願書の展示などの説明を聞いたことで継之助の人間像がよくわかりました。継之助は人間的には立派だと思うが、戦争によって多くの犠牲者がでたことを考えると指揮官としてはどうなのかな…と少し複雑な気持ちになりました。

そして、長岡も戊辰戦争などによりお城を焼失していますが、前橋にも幕末まで「関東の華」とうたわれた前橋城がありました。今は土塁の一部が残っているだけで本丸など跡形もないところは長岡と同じです。もう少し形として残っていればと思うと残念です。

（インタビュー／西川）

西国遊歴 その二 ●パネル紹介

旅先の心象を記録した『塵壺』のパネルと蓑

前回に引き続き、パネルで紹介している継之助自著の日記『塵壺』や手紙のうちいくつかをとりあげてみる。

九月二十三日　晴　（四日市）

「路はすこぶる遠く、往来はさみしく、山道故、退屈に思う。安芸はあきたりとたわむれ」

原文を見ると余白に小さな文字でだじゃれを書き入れているのがわかる。あえてそうしているところに、継之助の茶目っ気が感じられて面白い。またこの日の日記には地元の人に「三島より広島への御飛脚か」と尋ねられ、「おかしく思いける」とある。飛脚に見間違えられるほどの健脚ぶりがわかる。

九月二十七日　晴　（宮市）

「この夜はじめて蜜柑を食す」

宮市（防府市内）宿泊の際〝はじめて〟食べた蜜柑。感想もない端的な一文に継之助の思いを想像してみる。

九月二十九日　晴（長府）

「長府に宿す。この辺りの島々は皆萩の持なり。広大なる事なり。札も格別宜し、中国・西国は銀札にて政事の善悪も思わるる様なり」

茶屋の者との話で長府では「博奕は厳禁」で、犯す者も見物人も相当の罰を受けるが「近頃はする者なし」と知る。また、高札に書かれていた文言や銀札に関心を持つ。

十月四日　晴　（佐賀）

「神埼と云う処にて蓑を買う。松山へ帰る迄、一度も用いず、数百里を負い馬鹿らしき、限りなし。軍の時でも着るのかなど、独笑して荷居る。昼頃、佐賀へ着く。兼ねて聞く、アンシャロを見る」

佐賀城下で反射炉の内部見学を希望するが、手続きが必要なため断念。しかし、反射炉で造った大筒の船積みをちょうど見ることができ、その見事な出来栄えに感心する。

また、ここに書かれている蓑は、方谷の家で大切に保管され、後に山田家から牧野子爵家を通して長岡市の悠久山にある蒼柴神社で所蔵され、現在当記念館で展示している。

十月十七日　曇　（長崎）

「長崎逗留中は合わせて記す。通詞と懇意になる事は、皆、秋月の取り持ちなり。観光丸へ行きし事も、また然り。カピタン部屋を見る。其の奇麗、更に別世界なり。長崎には、実に長く居りたく思う。東北の山へ行く。唐寺二間を見る。一間は、門の額に、聖福禅寺とある」

長崎には十三日間滞在する。備中松山で出会った会津藩士・秋月悌次郎と再会し、彼の案内で唐館や蘭館、幕府艦の観光丸などの見聞をしている。また、経済状況に関しても、町中を回り買い物をしたり商品を見たり物の値段を聞いたりして観察している。商売交易の地・長崎で、外来の文明や唐人、西洋人に接し探究することで、さらに知識、見聞を広めることになったのである。また、現在残っている継之助の肖像写真はこの地で撮影されたものだ。

十月二十日　朝晴　（学料）

「精神を養い、胸中、手足に心を用う。予云う、生物じり一番悪し」

島原半島の大江から船で対岸の熊本に行く際、大嵐にあって遭難しかかる。継之助は船酔いで手足が動かなくなるが、「憂ても詮無き事なり」と開き直って、精神を安定させ寝てしまおうと横になる。日記には自分の精神状況を鋭く分析して記しており、危機に直面しても動じない継之助の豪胆さ、冷静さをすごく感じる。

十二月六日

「道中記行、考え記し、漸く終わる。何も用のある事はなけれども、他日、御両親様へ御咄のつもりと、思付きし事を記すのみ」

十一月三日に備中松山に到着。江戸から帰郷した方谷のもとで再び談論生活に入るが、その間、日記は天候の記述が中心となっている。安政六年（一八五九）六月七日から始まった『塵壺』は「十二月二十二日夜、終る」という一文で閉じられている。

年が明け三月に備中松山を立ち、その後の行動は万延元年（一八六〇）四月十八日に書かれた両親宛ての書簡によって知ることができる。山陰を通り、出雲大社を参拝し、途中城崎温泉に立ち寄っている。そして小浜から内陸にはいり、閏三月二十七日「京を立つ。また大津を通り、東海道へ心を決す。元来、京坂より紀州路迄もと志は御座候得ども、江戸の変より、京都始、甚だむずかしき」とあるように、江戸を目指すのである。

縦約八センチ×横約十七センチの旅日記『塵壺』、両親へ宛てた書簡は当館で展示している。また、毎週土曜日に「塵壺を読み解く会」を開催し、継之助の文字、文章に触れ、人間性・考え方・行動などを参加者全員で自由に意見を出し合っている。

（神保）

参考文献
『塵壺　河井継之助日記』安藤英男校注
『河井継之助の足跡を画く』池澤寛著
『河井継之助』稲川明雄著

河井継之助はどういう人物？

連載

その⑨　継之助のリーダーシップ

かつて、継之助を知る人は、その行跡を評して、風雲児だとか、奇傑、はたまた北越の蒼龍と呼んだ。正しくは蒼龍窟と号したのだが、四十一歳の臨終にあたっても、幼名を使っていたから、そう評したのかもしれない。しかし、行儀は至って、時代のなかに超然と生きた人物である。

幕末動乱期における若者の力は明治維新を成し遂げた。活躍した若者たちの多くには、勤皇とか攘夷とか、志士という呼称があったが、河井継之助にはそのような煌めきはない。むしろ、そういった草芥の勤皇志士を醒めた眼でみつめていた。

ところが、明治維新史において、河井継之助という地方の政治家・軍政家の名が残ったのはなぜだろうか。

坂本龍馬や高杉晋作らが、幕藩体制の枠を超えて政治・経済活動を実行して日本を生まれ変わらせたが、河井継之助は長岡藩という範疇から抜け出せず、ひとりの藩士として生涯を終えた。それも戦傷がもとで、非業な最期を遂げた。藩政改革を商工人の感覚で、武士の心で断行したというが、そういう矛盾を、いとも簡単に許容できる世界観を持っていた。ただ、継之助はものごとの矛盾をみつけると、人間の道理という仕分けで見事に解決してゆくという特技を持っていた。それも実行・実践を伴った良知（陽明学）の精神があった。

しかし、そこに至るまで、排斥をうけたりした。苦難の道を乗り越えてきた努力の人である。それが妙に現代に生きる人間に共鳴するところがある。

継之助の語録に「なくては成らぬ人となれ」という言葉があるが、社会において、人間の役割とは何だろうと思うことがある。継之助は坂本龍馬と同様に「本をさかさまにして読む」癖があったというが、ものごとの本質を見つけ出すには、そういった読み方もあるのだろう。

栃尾の荷頃の薬師峠の戦いで、「人が高い所というなら、おれは一番低い所を取ってみせようか」といって参謀役を驚愕させたと伝えられているが、案外、常識という殻を破った人物かもしれない。江戸遊学の久敬舎にあった際「人の世に生きていくということは、苦しいことも、嬉しいことも、色々あるものだ。その苦しいことというものに、耐えなければ忠孝だの、節義だの、国家の経綸だのといったところで、到底、成し遂げられるものではない」と諭したとあるが、人間の本当の苦しみを知っていた人物だとすると聖人であったろう。

ただ、継之助の語録につぎのようなものもある。「辛苦艱難（しんくかんなん）を楽しみに変えるというのは聖人のことです。しかし、ただ苦しんでするのでは、自分自身の考え方も本におけば、一分の仕合せ（幸せ）もあるものです」といっている。このように異体の知れない魅力を持っている。たぶん、感性において、時代を越えていたのかもしれない。やがて、近代日本が苦悩する矛盾を、封建の末期にあたって予測していたのであろうか。

「無理には使わず、快く承知させて、使うものも、使わるるものも互に愉快に仕事するのが得」と公言して部下を改革のために邁進させていたというから、リーダーシップもあった。

機と陽を視る

河井継之助が江戸を引きあげる慶応四（一八六八）三月、スイス人のファーブル・ブラントから日本に輸入されたばかりのガトリング砲二門を購入している。価は一門三千両だったが、コルト社の一八六五年製のガトリング砲は当時、世界有数の新兵器だったから、もの凄いものを買い入れたことになる。

ガトリング砲は元込めで、連発。弾丸も直径半インチ（一インチという説もある）で砲身は六穴ないし十穴の最新機関砲である。購入のキッカケは、かつて横浜のファーブル・ブラントの百七十五番館に通いつめた継之助が、新奇物好きだったによる。本当は、近付く兵火に、越後の小藩が怒涛の如く押し寄せる新政府軍にいかに立ち向かうかが、購入の動機であったのであろう。

近代戦争は火力がものをいう。それを使う指揮者も凡庸であってはならない。

そういう学習を、継之助は開港間もない横浜で見聞した。最初は開港間もない安政六（一八五九）年六月に横浜を見学してから、どうも、とりこになったらしい。それに同年秋に長崎に十日余り滞在している。

スイス人のファーブル・ブラントやプロシャ人のエネワード・スネルと懇意になるのも、西国遊学の旅を終えたころかららしいが、日時まで問われると定かでない。

今泉鐸次郎著の『河井継之助傳』にはブラントの館に居候を決めこむ継之助が「火の用心」の夜廻りをする条が出てくる。継之助は藩の公用で、江戸、長岡間を何度も往復したが、その間、江戸在府の際、閑ができると横浜に行ったのだろう。

文久・元治・慶応と続く幕末動乱期に、攘夷運動が高まる世間を余所目（よそめ）に、新しい時代の息吹きをいちはやく横浜に求めている。そういった好奇心が継之助の世界観を変化させ、ガトリング砲や新式元込銃を買い込む仕儀になったのだろう。

ガトリング砲を買い込んでみたものの、操作は英文で書かれたパンフレットのようなものが付いていただけだったという。それを英語が読める藩士に解読させて、足軽でも、とびきり頭脳の持ち主たちを集めて担当にさせている。もっとも弾丸が少なく試射することができなかったが、新政府軍が信濃川を奇襲渡河し、長岡城に迫った際、みずから操作して、轟然と発射して

いる。

たぶん、戦況の良し悪しよりも、ガトリング砲を操作できたことに深い感動を憶えたのかもしれない。

長岡落城後、二門のガトリング砲の行先は杳として不明である。退却の際、堀に投げ込んだとも、遠く八十里越えをし、大沼に没したという風聞もあるが、いまだにその形骸が明らかでない。

越後の小藩が、怒涛の如く押し寄せてくる敵に対し、どうしたら対等な外交戦略を立てられるかが家老としての河井継之助の器であった。兵力において長岡藩の劣勢はおおうべくもない。とすれば一挺で百人以上の働きをする兵器を備えねば、対等の交渉はできないだろうと、継之助は考えたのだ。

継之助はよく王陽明の詩を口誦していたという。そのなかに、

物情の向背を洞して
その機を握り
陰陽の消光を察して
その運に乗ず

というのがある。戦機・勝機は何で判断をするのかと継之助に問うことがあれば、継之助は「我にガトリング砲あり」と答えるにちがいない。

（稲川）

「塵壺」を読む

9 連載

西国遊学では、種々な人物と出会っている。伊勢の津で出会った聲牙（ごうが）と号した土居幾之助には度肝を抜かされたらしい。津藩士神吉某の案内で藩校有造館を訪問したのが安政六年六月二十三日。藩校から土居を訪ねた。「神吉の案内にて学校（有造館）を見、入用之所計りにて、拵方面白、夫より土井（ママ）を訪、奇人也」と『塵壺』にある。季節は夏。旧暦のことであるから裸体で書を書いていたらしい。そこに継之助が訪問した逸話が『河井継之助傳』にある。

「継之助の訪へるを見て、匆惶、座を立ち、衣を着けんとす。継之助を見て、先生、其の儀に及びませぬといふ言下、聲牙は顧みて、夫なら、己の書たものを貰って呉れる積りかと反問せり。問、既に奇なり、答え、豈、奇ならざるを得んや、継之助、言に応じて、私はまだ人から字なんぞ書て貰ったことは無いが、然し下さるなら戴きませうかと対ふ。斯て、一礼終りし後、継之助卒爾として、私は先生から叱ってもらいたいと思って参りましたと言ひ出したるに、聲牙は暫く、其顔を見詰めたる後、何だ、人の言ふことを聞きそうも無い顔している癖にといへば、継之助もそうそんなに人の言ふことを聞かぬが、然し聞くやうなことなら聞きませうと応じ、是より談論を移して辞し帰れりといふ」とある。

土居とはその後、交遊があったことが、備中松山から土居に宛てた書簡などがあるが内容は不明である。その土居が奇人であることに面目躍如の話である。聲牙は幼少から多病で、いく度も死にかかったことがあった。そのたびに養生に努め、儒学者の家に生まれた本分を尽すため読書をして乗り切ってきたというのである。しかし、「読まんと欲する書は、いまだ読み尽さぬ、敢て長寿を望むにあらず、敢て名誉を求むるでもない」境地に達したから、奇人であったというのである。

伊勢の学者で奥田三角というものがいたが、彼は三角形の家を造って満溢した。しかし、それに対して土居聲牙は、七面堂と三角堂を建てたという。越後が生んだ碩学市島春城の『藝苑一夕話』に七面堂・三角堂の言い訳が載っている。

「虚名のために教へを請ふものの、詩文書画などを請ふものが、日増に多くなって、これを拒むことが出来ぬ。かくあっては病身の上に老と衰とがますます加はって来て、到底遣り切れぬ。ここにおいて、七面堂を作る事を思ひ立ったといふている。

七面堂は世事を避けんための城廓である。その構造は、七角堂であるのはいふまでもないが、ここにこの堂の特色ともいふべきは、七面共に壁を厚く塗って戸牌も設けず、転窓も作らず、空気も通らず、日光も入らず、堂中真黒闇であるの一事だ。この中に座すれば、目に賭るところなく、耳に聴くところなく、心に思ふところなく、ここに始めて完（まった）く閑を得るのである。世事を避けて、一息の命を保つ道は、只、この堂に入りて静座するの外はない」と土居が説明したというのである。継之助も土居をたずねた際、書を懇う輩の一人とみられ、便所にかけ込みながらも継之助に一書を与えた話は著名だが、土居と腹臓なく話し合う機会を得ることができなかった。因みに七面堂の片わらに土居幾之助は三角堂をたてているが、その意を聲牙はつぎのように説明している。

「荀しくも人生、命を天に享け、呼吸のある限り、絶対に交際を拒む事は出来ぬ。三角堂はそれがためで、堂中室を三つに画し、各々別種の客を引くやうにしてある。すなわち、一画を君父、師長、承恩の人に接する所とし、一面を親族、骨肉、旧識、僚友と交はる所とし、他の一面を文雅、風流、技芸の人と接する所としたといふ」

安政六年七月七日、継之助は両親宛に書状を認めている。西国遊学に旅立ったのが、ちょうど一か月前。その間、旅の途中で見聞した様々なことを両親に知らせる書状であった。

書状は、京・大坂にしばらく滞留し、備中松山へ旅立つ朝にしたためたものである。

内容は旅日記『塵壺』から、大略、書き写しているが、多少、表現の違うところがある。末尾に「松山行之季候」とあるから、松山の山田方谷のところへ勇躍向う継之助の心持もあらわれている。

この書状には新しい発見がある。旅日記『塵壺』にない記述である。たとえば京都・大坂の名所旧蹟の見学箇所や感想が記されていることである。

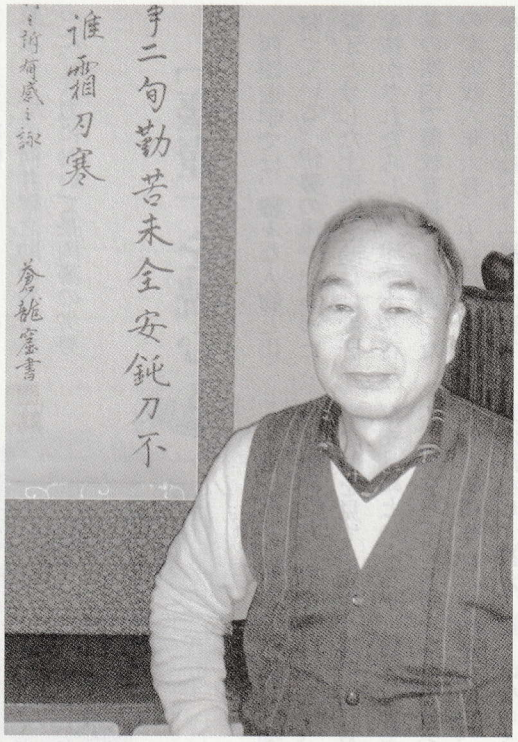
父の代右衛門は京都詰を体験したことがあった。十代藩主牧野忠雅が京都所司代職にあった際、随伴したものであったが、風流人の父のことであったから、公務の間に社寺・旧跡の見学は欠さなかったであろう。そこで継之助が自ら見物したところを書き送っている。

（稲川）

河井継之助記念館友の会理事として、友の会を支えてくれる猪本爾六さん。美術に造詣が深く、特に櫛・簪・子供の着物に詳しい長岡の美術集団「風羅会」の研究家です。今回はそんな猪本さんから、継之助に魅かれたきっかけやエピソードを伺いました。

人生はドラマだ

アイキ・ドライ　店主　**猪本　爾六**さん（七十二歳）



宮路騒動に詠んだ河井継之助の書をバックに

Q・河井継之助との出会いは？

子供の頃から、長岡市富島町生まれの父から河井継之助の色々な話を聞いていました。父は河井総督と言っていました。

祖母は八丁沖のほとりの福島生まれで、大黒の戦いの時に西軍が大砲を打つと、赤熊を付けた男が「おみしゃん達も関の声を上げよ」と言うので、村人は大砲を打つたびにワァーと言った。その内に鉄砲の弾が飛んで来るので、蓑を着て逃げ出した等と聞かせてくれました。その様な話を聞いて、住むなら長岡だと思いました。クリーニング店を二十四歳で開業した頃、古道具店には、戊辰関係の資料が色々と有ったものです。

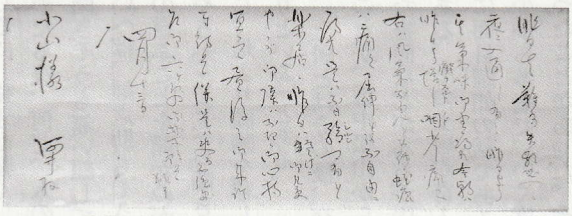
Q・資料を集めるきっかけは？

牧野忠精の雨龍、継之助、病翁、雪城等の書画類が売りに出ていました。一度帯刀竹塘の書も見ましたがあの頃は安かったです。安いと言っても、こちらも金も無く持っている人から見せて貰っておりました。その人達も、年を取ったし公共に寄付してうやむやになるよりも、あなたならば大事にしてくれるという訳で頂いた物がこれらの品物です。

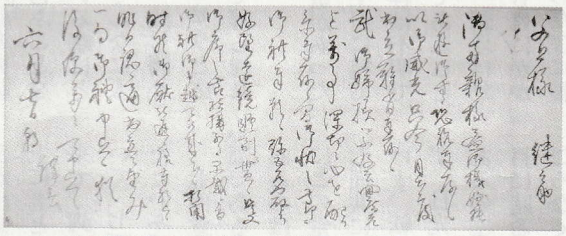
遠縁に高橋竹介がおりまして、甥の高橋虎さんより継之助の使用した遠眼鏡と絶筆の漢詩を頂きました。

Q・資料を通しての思い出は？

中沢の専行寺の本堂で、傷付いて寝ていた長岡藩士を西軍が切り殺した跡があると言うので、畳を入れ替える時に探しに行きました。畳のへりから流れた血の跡が床板に、畳の形通り黒くしみが付いていました。先年床を張り替える時、その部分だけは残して欲しいとお願いに行き下から補強して無事残りました。



風邪の様子を伝える小山良運あての手紙



山田方谷に会いに行く　品川宿より両親への手紙

住職の子、木村円解さんはそれを見ていたのでしょう。明治十年西南戦争に行き、十一年近衛兵の反乱、竹橋事件で首謀者の一人になっています。県内からは他に二人いまして、その内の一人で見附出身、高橋竹四郎の遺族を私が見つけました。

首謀者五十五名は、東京の越中島で銃殺され闇に葬ったのですが、百年後に沢地久枝さんが「火はわが胸中に在り」を出版され、それ以来四十年近く付き合いさせて頂いております。

Q・他にエピソードがありますか？

三条市吉野屋の土蔵の床下に、西軍が置いて行った大砲が一門あったのですが、会津が持って行き鶴ヶ城に有ります。科博の館長の小柴五郎さんが、返してくれと言ったのですが、返してくれないと口惜しがっておりました。長生橋の上流に一門埋まっています。だいぶ上流に行っていると思いますが。

また、歴史読本の企画で作家の早乙女貢さんと八十里越えをした事が有ります。物書きは足弱で、三十分もすると足はマメだらけ。枝を拾って付きながらまるで落人の様でした。

Q・資料の発見は？

朝日山で戦死した松下村塾の俊才、時山直八の書を東京で見つけました。

明治の頃は有名だったのですが、フォション一缶位の値段でした。作家の安藤英男さんも、時々私の家に来ました。根岸練次郎の近所に住んでおり、根岸千代子さんの兄満さんと友達でした。明治になって、小千谷の慈眼寺で根岸練次郎と岩村精一郎が出席して法要が有った時、喧嘩別れをしたそうです。練次郎の気持ちはわかる気がしますが、明治政府の顕官となった西軍の指導者達は、岩村一人を悪者にして責任を回避したのではないか、山縣有朋や木戸孝允は岩村を罵って「きょろま（軽率で無思慮と言う長州の方言）」と言っています。山縣・木戸は果たしてのしるだけの資格があるのだろうか。駟も舌に及ばず。

（インタビューと写真　松山）

猪本爾六（いのもとじろく）**プロフィール**

1940年燕市（吉田町）に生まれる。主に横浜・東京・京都を西行。合気道養神館に内弟子に入り、三段。神道夢想流杖道二段。長岡杖道会会長、県杖道部副会長。京都祇園「萬常」越後会会長。アイキドライ店主。継之助の子孫・根岸千代子さん（米国在住）とは三十年来の交流。座右の銘「審思篤之行」

河井継之助没後百四十四年祭法要

法要後墓前に参る

平成二十三年十月九日、秋晴れの中、河井継之助没後百四十四年祭法要が、当会の主催で菩提寺の栄涼寺で営まれた。

祭壇には寺院が所有する継之助の肖像画が掲げられ、長岡藩十七代藩主・牧野忠昌氏が祭主を務められ「西軍の不当な要求にも屈せず、また藩政改革も成果を上げ始めた中での戦死は無念だっただろう」と祭文を読み上げられた。

間もなく住職の読経が始まり県内・外からの参列者が次々に焼香した。その後河井家遺族を代表し八代目当主・河井弘安氏が「百四十年以上経った現在も、継之助が皆様に慕われて光栄に思います」と話された。法要後、継之助の墓前に偉業を偲び参列者全員で手を合わせた。（伊佐）

祭文を読まれる牧野忠昌氏

●法要に参加して

河井さんの命日である慶応四年八月十六日は西暦に換算すると十月一日に当たります。空の高さや青さ、空気の爽やかさ、風の冷たさ。「その日」はどんなだっただろう？　河井さんが最後に見た空はどんな色をしていたのだろう？　何を思っていたのだろう？　今の私には、あれこれと想像することしか出来ませんが、戊辰の当時に思いを馳せる厳かな時間を、栄涼寺の本堂と河井さんのお墓の前で、静かに過ごさせていただきました。

―岡村律子（中魚沼郡津南町）

●法要に参列して

去る十月九日、この時期にしては少々暑気を感じる陽気でしたが、栄涼寺で執り行なわれた百四十四年祭法要に参列いたしました。その後、歴代長岡藩主や幕末維新を生きた藩士たちの墓所を訪ね、合掌いたしました。今、我々が手にしている平和は、河井総督や山本元帥の願いが結実したとの見方もできます。私たちは今後も平和を守る努力をし、国際社会にその尊さを発信し続ける必要があると思いました。

―野村昌弘（栃木県佐野市）

会員の声

「会員の声」大募集！

●知行合一

社業において自分を変えるため名古屋で来年40周年を迎える経営者の研修塾に入塾しました。塾の柱となる精神に「知行合一」があり、教本として司馬遼太郎の「峠」を塾生全員が読みます。二年生の夏に毎年同期塾3～4塾（＝クラス）総勢約200名の塾生が慈眼寺、開戦決意の前島神社へ参ります。これを「長岡研修」と称しており、前島の地で各塾の代表が並々ならぬ決意を述べます。その前段階で「峠研修」と称する研修があり、何事にもブレずに自身の考えを貫き通す河井継之助の精神を学びます。自塾の研修リーダーとしてまず墓前に挨拶しに行こうと昨年夏長岡を訪れました。より深く知るための入会です。

―河合保人（愛知県名古屋市）

●河井継之助と山本五十六

私は幼少の頃、おばあちゃんに祖母が河井さまのこと、米百俵のことを話してくれたことを思い出します。当時明治生まれの男の年輩の人達は何時も官軍と言わず薩長のヤツラと呼び捨てにしていました。長岡藩は賊軍ではないぞ！とくやしそうに語っていました。後年山本帯刀家が恩赦で復興したため後継に高野五十六海軍少佐が継ぎました。高野五十六はこの名門山本家を継ぐことによって長岡藩の運命を自覚して生涯を送ったことです。

―三條和男（東京都武蔵村山市）

●塵壺を読む会に参加中

河井さんの旅のあとをおって歩き始めて、塵壺全体の3分の2位のとこに来たのかなと思っています。（途中からの参加です）巷間伝わっている剛毅の河井さんでなく、富士山登るか、止めるか、雲行きを気にして道を行ったり来たり右往左往する河井さんに親しみを感じます。旅の途上の旧所名跡、神社仏閣、物産、流通などに興味を持ちよく勉強されているのに驚きます。武士でありながら、特に経済に関心があったのではないか。経済感覚、センスの良さを感じます。河井さんに関する著書の著者に銀行出身者を見受けられるのは何か共感するところがあるのでしょうか。とにかくあらゆることに興味があり、またそれぞれの核心を掴む洞察力があったのではないか。現在でも決して古さを感じません。私自身は不勉強ですが、仲間の皆さんの話を聞くのを楽しみに参加しております。気軽に何でも聞けるおおらかな会ですので楽しみに出掛けております。

―松川　勇（長岡市）

「会員の声」大募集！
原稿は二百字以内（題名、氏名は字数外）、事務局までお送りください。投稿を心よりお待ちしています。

●記念館オリジナルポストカード販売中！
（5枚組、パッケージ付300円）郵送も承ります。

●司馬遼太郎著『峠』を読む会
毎月第3月曜日　午後6時30分～8時

●河井継之助旅日記『塵壺』を読み解く会　好評開講中
毎週土曜日　午後1時～3時

●今泉鐸次郎（たくじろう）著『河井継之助傳（でん）』を読む会
第2・4月曜日　午後1時～3時

●楽しい詩吟教室：第1・3月曜日 午前10時～11時30分
詳細は記念館へお問い合わせください。

記念館日誌　某月某日

記念館には、市内外の小・中学生が校外学習で見学に来ます。ガトリング砲に興味津々で動かしている子、ガイドさんの説明を熱心に聞いている子等・・様々ですが、郷土の先人の教えを学ぼうと懸命にメモを取っている姿は微笑ましいものです。

ある日、自由見学の時間に熱心に銅像を見ていた少年。おもむろに自分の眼鏡を継之助像にかけて「意外と似合うじゃん」と一言。一瞬みんなが顔を見合せた後、御茶目な行動に大爆笑でした。継之助の伊達姿が、子供には身近に映ったのかもしれませんね。（雙田）

河井継之助記念館 ボランティアガイドの会・活動報告

ボランティアガイドの会会長　戸松　茂樹

河井継之助記念館ボランティアガイドの会（以下ガイドの会）のメンバーは九名（うち女性一名）です。主な活動は土曜・日曜・祝日及び長岡まつりに河井継之助記念館に来館され、案内を希望されたお客様にガイドをします。午前と午後メンバーは交代します。毎月各メンバーは二～三回ガイドをします。

ガイドの会の特徴はガイドマニュアルがないことです。各自が勉強したことをもとにガイドしています。これは五年前ガイドの会ができたときからの特徴です。メンバーはマニュアルにとらわれることなく自由にガイドをしています。展示物のガイドのほかに、河井継之助物語を語るようにガイドをする人。藩政改革を重点的にガイドする人。戊辰戦争を中心にガイドする人。継之助の生き方をガイドする人。毎回自分でテーマを変えてガイドする人。など様々です。

メンバーが一番心がけていることは「おもてなしの心」を持ってガイドをすることです。また、お客様の希望する時間内にガイドが終わるように心がけています。越後長岡ひなものがたりの期間中はガイドの会よりお菓子をプレゼントしています。一生懸命ガイドをすると必ずお客様に伝わります。お客様と会話のキャッチボールをしながらガイドをするのは楽しいものです。「分かりやすくて、とても楽しかった。ありがとうございました。」と言われたときはガイド冥利に尽きます。

毎月第三月曜日にガイドの会の定例会を行っています。来月のガイドスケジュールの決定。メンバーによるガイドの実践。お互いのガイドのやり方、考え方を知るよい機会です。自分のガイドにも役立ちます。館長による河井継之助や長岡藩のお話はとても楽しい内容です。楽しみながら知識が増えていきます。

年に一度、河井継之助に関する史跡をめぐる日帰り研修会も行っています。現地を訪ねることで初めて理解できることもあります。河井継之助をもっと深く知る大切な研修です。

ガイドの会はメンバーを募集しています。一緒に河井継之助の魅力をガイドしませんか。河井継之助に興味のある方、ガイドをしてみたい方はぜひ河井継之助記念館にご一報ください。

ガイドをする戸松茂樹さん

ガイドの会の定例会風景

河井継之助記念館　友の会について

会員の交流や情報交換を通して継之助について親しみ、学び、記念館を応援する会です。

●会員数／正会員：519名／協賛会員：62名（2/15現在）　会員募集中

●特　典／①友の会会報「峠」配付
②会員との交流　③催事案内・参加　④研修旅行への案内・参加

●入会手続き
①申込書に会費を添えて、事務局へ持参。
②申込書を事務局へ送り（郵送、FAX）、会費は銀行振込または郵便振込で納入。（手数料は本人負担となります）

●年会費　※会計年度は3月31日まで
①正会員/(ア)小・中学生:5百円　(イ)高校生以上：2千円
②協賛会員／一口5千円(法人の他、個人でも可)

●口座について
・加入者名／河井継之助記念館友の会
・口座番号／

郵便局	00560—9—96432
長岡信用金庫関東町支店	普1032829
北越銀行本店	普1764663
大光銀行本店	普3011256
第四銀行長岡営業部	普1560562

※郵便局の場合は手数料無料の払込用紙が事務局にありますのでご利用ください。

●友の会事務局／河井継之助記念館
友の会ホームページアドレス　http://tsuginosuke.net/

新入会員 ご紹介

（平成23年11月1日～平成24年2月15日現在）

石塚　淑子	新潟県長岡市	原山　紀夫	東京都八王子市	㈱リアルフォーチュン	東京都渋谷区
入澤　紀子	新潟県長岡市	山田　清	新潟市中央区	渡邉　信夫	新潟県長岡市
多川　稔	新潟県長岡市	山近　義幸	東京都小平市		
千葉　俊祐	岩手県盛岡市	吉野　泰雄	埼玉県さいたま市		

以上10名（アイウエオ順・敬称略）

編集後記

●雪国の風物詩とも言える冬化粧も、春一番の到来と共に見納めを迎えつつある中、皆様いかがお過ごしでしょうか。桜舞う春は心躍る季節でありますが、同時に未曾有の大震災から早くも一年が経過しようとしています。被害にあわれた皆様には謹んでお見舞いを申し上げます。春一番、と言うとやはり幕末を疾風の如く駆け抜けた、かの蒼龍窟を彷彿とさせますが、春の息吹と暖かな太陽の日差しが人々に希望と生きる力を与える様に、かつて激動の時代に翻弄されながらも一途に己の意志を貫き長岡の民を導いた河井継之助の生き様が、少しでもこの混迷の時代を生き抜く為の道標となればと願わずにはいられません。本年度もどうか当館と友の会を宜しくお願い致します。（丸田）

生命力を感じさせる椿の蕾

編集人・稲川明雄　丸田めぐみ　松山美月
伊佐春美　神保智子　雙田幸代
西川里美
会報委員・猪本爾六　瀧澤　学　松山賢二
渡邊静江
構成・月刊マイスキップ編集部
印刷・高速印刷株式会社